

〈研究ノート〉

「対話的な学び」の教育原理的考察を踏まえた 教育実践方法学からの提案（1） －新学習指導要領とソクラテスの「対話」教育の 関連性を事例として－

Proposal from educational practice method based on fundamental consideration
of education of “interactive learning” (1)

－ Taking the Relationship Between the New Course of Study and the Socratic Method as an Example －

姫路市立白鷺小中学校 山口 偉一*¹

要約：対話による哲学の始祖とされるソクラテスは混乱する社会状況の中で対話を方法原理として真理を探究することを通してアテナイ市民の資質向上を図った。新学習指導要領との共通点を、①ソクラテスの教育を目的、内容、方法の視点から整理し、ソクラテスの見方・考え方を抽出した。②新学習指導要領の構造を分析フレームとしてソクラテスの教育を見方・考え方を中心に分析・検討した。その結果、『愛知』、『徳』、『善』の視点から在り方生き方を探究することがソクラテスの見方・考え方と捉えることができる。

Key words：市民の資質、真理の探究、対話、愛知、徳、善

1 はじめに

平成29年に文部科学省は新学習指導要領を告示した。この新学習指導要領では、基礎・基本を徹底し、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」をはぐくむ観点から、個性を生かす教育の充実のために、学校教育の質的な転換を求めている。その質的な転換は、授業改善であり、「主体的・対話的で深い学び」となる授業の実現である。そして、特に「対話的」な授業を行うことで確かな学力を子供につけることが重要であることを指摘している。ここでいう「対話的」とは、子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的

な学び」の実現を目指している。このように身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが重要であるとする。

しかし、管見の限りにおいては、「主体的・対話的な深い学び」はどのようにしたら可能になるのか、それを可能とする条件は何なのかといった教育原理は示されていないと考える。そこで、本論においては、教育原理の立場から「主体的・対話的で深い学び」という概念について検討する。中でも特に「対話」の教育的機能に焦点を絞って論じていく。具体には、これまで教育思想研究において論じられてきた「対話」を通じた主体的深い学びについて、ソクラテス

*¹ Ichi YAMAGUCHI
Hakuro Elementary and Junior High School

の教育論から吟味していくことを通して教育実践への糸口を見出すことを目的とする。

2 対話について

小林は、歴史は自分を映すための鏡、すなわち自己認識の手段であるゆえに、クローチェは「歴史はすべて現代史である」と捉えたと述べる。これは、歴史を学ぶことの意義の一つは、歴史上の人物などに憑依してその人の目で見て考えること¹⁾が、その人物との自己内対話を生み自分を相対化して捉えることで新たな自己認識と、現代を見る新たな視点や捉え方、つまり新たな時代認識を形成することにあるということである。このことはそれまでの自分の見方・考え方とその人物の見方・考え方が止揚して新たな世界を開くことを意味する。

また、あらゆる歴史的人物は、生まれた社会とその時代の政治・経済・社会・文化状況から逃れることはできない。よって、その人物の見方・考え方を考察するためには、彼らの生きた時代の状況の把握が必須となる。

さらに、「新しいと称する教育の原理は、それが優れたものであるほど、よく検討してみれば、形や言葉こそちがえ、長い人類の教育の歴史のどこかにあらわれたものであることが多い。」²⁾との指摘がある。このことから時空間を隔てて示された教育の原理を比較し、その類似性を明らかにするためには、対象となる原理の構造を分析的に検討しなければならない。

上記3点をもとに新学習指導要領が示す授業改善の方向目標である「主体的・対話的で深い学び」の構造にもとづいて、対話³⁾による哲学を開いたソクラテスの教育原理⁴⁾を読み解いていく。

3 ソクラテスの教育

(1) ソクラテスの生きた時代

ソクラテスが生きた70年ほどの間（前470 -

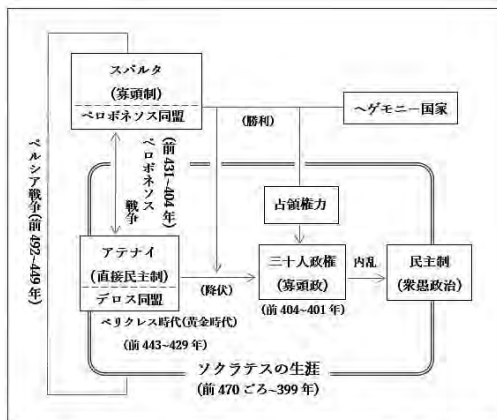


図1 ソクラテスの生きたアテナイの政治状況の変遷（筆者作成）

399年)はアテナイにとって変動の激しい時代であり(図1),3期に区分することができる。第1期は、政治的・文化的な上昇期であり、ソクラテスの青少年期に当たる。第2期は、アテナイの全盛期(ペリクレス時代)であり、ソクラテスの青年期に当たる。この時期がソクラテスのもっとも活発な探究と形成の時代である。第3期は、ペロポネソス戦争の勃発に始まるアテナイの没落の時代であり、戦争の敗北と三十人政権の寡頭政から内乱を経て衆愚政治へと移行した。この時代こそがソクラテスの人間的完成および社会的・教育的活動の時代である⁵⁾。つまり、ソクラテスの生きた時代は、アテナイの上昇期から全盛期を経て没落期に至っており、このような時代を背景にソクラテスの思想が形成され、それに基づいて活動がなされた。

(2) ソクラテスの実践

ソクラテスは、アテナイの街で若者と反駁的対話を繰り返し、無知の自覚と真理への探究を通して市民の資質を高めようとした。これをソクラテスの教育と捉えると、その原理は、目的としての市民の資質向上、内容としての知識、方法としての対話による真理の探究となる。目的、内容、方法の3視点から、ソクラテスの教

育を整理する。

①目的としての市民の資質向上

当時のアテナイの民主政の原理は大衆の説得を通じた「数の力による正義」であり、説得のためにデマゴギー（大衆扇動）とポプリズム（大衆迎合）が行われた⁶⁾。

その説得技術を授けたのがソフィストである。ソフィストは、真理へと誘う知識は必要とせず、大衆が何を正しいと考えているのか、何を欲しているのかを推察しその方向へ議論を導く技術の有無を人の卓越性を計る尺度とした。そして人々は快を求めることを幸福とし、それを保障する政治を社会的正義として受け入れた。このような状況の中で、ソクラテスは「善き国家、善き市民とは何か」など「・・・とは何か」という根源的な問い⁷⁾を探究することで、徳に関する知識を身につけ配慮すること、つまり「善さ」に向け「私たちがそれによって賢いとか愚かであるとか、善いとか悪いとか言われるところのもの」⁸⁾である魂の世話をすることを通して善き市民になるための資質を育成した。ソクラテスが説いたのは「人間にとって最も大きな善いことはまさにこのこと、すなわち日々徳について、-略-論じることであって、他方、吟味を欠いた生というものは人間にとって生きるに値しない」⁹⁾のであり、「いちばん大事にしなければならないのは生きることではなくて、よく生きること」¹⁰⁾なのである。

また、魂の世話は、「個人における人間的智慧の自覚という個人的な側面」と「市民的徳の自覚という社会的な側面」¹¹⁾をもち、両者の往還を通して市民としての資質を高めようとした。

②内容としての知識

ソクラテスが自分の使命にめざめ、積極的に教育活動を行うようになったことを「ソクラテスの回心」と言う。これの契機となっ

たのが、デルフォイの神託事件である。これは、友人がデルフォイのアポロ神に「ソクラテス以上の賢者があるか」と問うたところ、「ソクラテス以上の賢者は一人もいない」との神託が下りたというものである。ソクラテスは、自分が無知であるにもかかわらず、神は「もっとも賢者である」と言ったという矛盾に煩悶した後、神託の意味を「自分が善なること美なることについて無知であるということを知っている（知らないことを知っている）」¹²⁾という点について他の者よりも賢者であると捉えた。つまり、善美のことがらについての無知の自覚が、人間にとって最高の賢さであり、人々に無知であることを自覚させることが神に与えられた使命であると受け取ったのである。では、ソクラテスは知識を持つということをどのように捉えていたのであろうか。

佐伯は、知識は持つものではなく、求めるものであり、知識を求めるとは、真理へと接近する試みであるとする。また、真理が永遠の普遍性である一方、人間は知性も人生も有限で限界の中にあるので、人間は永遠の真理を手に入れることはないとし、続けて次のように述べる。

「大事なことは、真理を手に入れることではなく、ひたすら真理を求めることである。真理へと至る知識を徹底して愛し、求めることであろう。そして、その第一歩は、己がまったく真理などわかっていない、と認めることであった。知識など持っていないと認識することであった。誤った知識(ドクサ)をいくら積み上げても意味はない。それなら、自分は何も知らないという自覚の方が重要なのである。真の知識(エピステーメー)を求めること。真理を知りたいと思うこと。これが本当に知識に関わることである」¹³⁾

ソクラテスは、知識を持っていないから「知識を求め、愛し、求め」を、繰り返し、繰り返し行うこと、すなわち、真理を探究する過程で生まれる知識が教師ソクラテスの扱った知識である。

③方法としての対話

ソクラテスの対話による規範知の明確化は次の三段階によってなされ、思考は深められていった。第1段階「人々の関心を徳（魂）の方へ向け変える段階」。第2段階「徳とは何かを問うことを通して人々の無知を暴露する段階」。第3段階「より高度な規範知を出産・獲得させる段階」。¹⁴⁾

ソクラテスは対話によって決して手に入れることができない真理に向けての共同の探究を行ったのであるから、対話（真理への探究）によって解を得ることはできず、常に新たな問いを生むことになる。ソクラテスの対話は問いの連鎖であった。そのような状態におかれた時、人々の思考は自己内対話を繰り返しながら開かれたものにならざるを得ない。つまり、ソクラテスの対話は相手とともに真理に向けて問い続けながら深まっていくものであり、それに随伴して問いが連鎖し思考を深めることを通して新たな知へと開いていくものであった。

4 おわりに

このように、ソクラテスの対話が果たす教育的機能を検討してきた。それをもとに、教育実践を行うための方法論について提案する。

これまでの考察において次の3点が明らかになった。①ソクラテスが活躍した時代がペロポネソス戦争の敗戦とそれに続く三十人政権（寡頭制）を経て人々が「快に動かされる民主制」という時代の混乱期であったこと、②そのような中で、ソクラテスは人々に「愛知」、「徳」を中核として真理に向けて善く生きることを対話

によって説いたこと、③「愛知」、「徳」、「善」の視点から在り方生き方を探究することがソクラテスの見方・考え方と捉えることができること。

今後は、新学習指導要領の構造にもとづいて、ソクラテスに依拠した教育原理を構築するために、教育実践における方法について明らかにしていきたい。

【注・文献】

- 1) 小林は、歴史は詮索するものではなく共感しなければならぬと述べる（小林秀雄（2014）『学生との対話』新潮社、pp.127-129）。これに対して梅原は、一定の評価をしながらも冷めた目で距離を持って対象を眺めることが欠けていると批判している（梅原猛（2011）『学ぶよろこび』朝日出版社、pp.180-181）。
- 2) J. S. ブルーナー、鈴木・佐藤訳（1994）『教育の過程』岩波書店、p.133
- 3) 「対話」は英語では「ダイアローグ dialogue」。ギリシア語の「ディアロゴス dialogos」に由来する。「人と人の中で交わされる言葉」というのが「ディアロゴス」の意味。納富信留（2020）『対話の技法』笠間書院、p.15
- 4) 北島知量（1995）『ソクラテス研究』高文堂出版、pp.255-272
- 5) 村井実（1995）『ソクラテスの思想と教育』玉川大学出版部、p.5。教育に焦点化しソクラテスを捉えたものに村井実（1966）『教師ソクラテスの研究』牧書房がある。
- 6) ソクラテスは「善さ」を「快さ」として大衆に迎合するソフィストの主張は成り立たないことを示した。このことはプラントンによって「善さのアイデア」として示された。村井実（1988）『「善さ」の構造』講談社学術文庫、pp.27-29。
- 7) 問いは無知の自覚と知への欲求からなっており、無知を自覚するには、何を知らないのかを知らなければならず、何かを知らないということは、逆

に何かを知っていなければならない。人間が対話しなければならないテーマは、「何か what」,「なぜ why」,「どのように how」であり、哲学の問いは、「～とは何か」（存在論的な問い）と「なぜか」（根拠の問い）である。河野哲也（2020）『人は語り続けるとき、考えていない』岩波書店, pp.75-77

- 8) 村井実（1995）前掲書, p.106
- 9) プラトン, 三嶋輝夫・田中享英訳（2021）『ソクラテスの弁明・クリトン』講談社学術文庫, pp.73-74
- 10) 同上書, p.137
- 11) 村井実（1995）前掲書, p.106。前者は「我的世界」に、後者は「我々の世界」と捉えることができる。「我的世界」,「我々の世界」については梶田叡一（2009）『日本の感性 和魂ルネッサンス』あすとろ出版, pp.103-108。
- 12) 納富は「不知の自覚」を「無知の知」として解釈したことは完全な誤りであると説明している。納富信留（2017）『哲学の誕生』ちくま学芸文庫, pp.275-299
- 13) 佐伯啓思（2020）『近代の虚妄』東洋経済新報社, pp.64
- 14) 北畠知量（1995）前掲書, pp.256-257。ソクラテスの反駁（対話）の構造については、岩井靖夫（2014）『増補 ソクラテス』ちくま学芸文庫, pp.102-103。

（令和3（2021）年11月9日受理）

Abstract

Proposal from educational practice method based on fundamental consideration
of education of “interactive learning” (1)
– Taking the Relationship Between the New Course of Study and
the Socratic Method as an Example –

Hakuro Elementary and Junior High School Iichi YAMAGUCHI

Socrates, who is said to be the founder of philosophy through dialogue, attempted to improve the qualities of Athens citizens by exploring truth using dialogue as a method principle in a confused social situation. The commonalities of both are arranged from the viewpoint of (1) purpose, content, and method of Socrates’s education, and Socrates’s view and way of thinking are extracted. (2) The structure of the new course of study was analyzed and examined mainly on the viewpoint and the way of thinking of Socrates’ education using the analysis frame. As a result, it is thought that exploring the way of life should be from the viewpoints of “Aichi”, “Virtue”, and “Good” is Socrates’s view and way of thinking.

Key words : Civic Qualities: The Search for Truth Dialogue Aichi Toku Zen